

『十訓抄』の中国故事

— 帝王にまつわる説話をめぐって (下) —

西田 禎元

VI 玄宗皇帝をめぐる説話

玄宗皇帝(685~762年)は盛唐時代を代表する皇帝である。治世の前半は、〈開元の治〉として名君の誉れ高かったが、楊貴妃(719~756年)を迎えてからの晩年は、傾城の皇帝として名高い。

わが国においても、白居易(772~846年)の『長恨歌』を通して、『源氏物語』などの文学作品以来有名である。

説話文学の分野においても、幾つかの故事が伝えられている。

『十訓抄』を彩る玄宗の説話は、以下の四篇である。

(その1) 第七「可_レ専_二思慮_一事」第1話

玄宗と西王母をめぐる話である。

唐玄宗の宮に、西王母と云仙女参て、仙桃を七ツ奉れりけるを、「此種を我宮に移さむと思ふ。」と宣せたりければ、王母打わらひて、「天上の菓、人間に留りがたくや。」と申て、はかなげに思ひ奉りけり。(192^(註1)ペ)

西王母については、幾つかの伝承が見られ

る。

虎の歯牙と豹の尾をもつ半人半獣の神であったり(『山海経』)、羿(姮娥の夫)という弓の名人に〈不死の薬〉を与えたり(『淮南子』)、崑崙山の玉殿で周の穆王に接見したり(『列子』)、下界に降りて漢の武帝に七個の蟠桃を与えた(『列仙伝』)というようなものである。

こうした中で、〈蟠桃七個〉の故事は、わが国平安時代の歌物語である『平中物語』にも影を落としている。

『列仙伝』に記されている次の故事を踏まえた歌が、『平中物語』に記されている。

降_二武帝殿_一、進_二蟠桃七枚於帝_一、自食_二其二_一、帝欲_レ留_レ核、母曰、此桃非_二世間所_レ有、三千年一実耳(『列仙伝』)

『平中物語』では、〈男〉に三年間待たされた〈女〉の皮肉な表現の歌として詠まれている。

ふりにける年の三年をあらためてわが世のことと三千年を待て(『平中物語』32段、日本古典文学大系93ペ)

この『十訓抄』の説話も、〈蟠桃七個〉の故事に拠っている。しかし、西王母と漢武帝(前158~前87年)の話ではなく、西王母

と玄宗皇帝の話になっている。

間違い・勘違いという解釈も考えられるが、おそらく以下に述べるような方法に関係があるろう。

白居易の『長恨歌』冒頭に詠われている「漢皇」が、実際には玄宗皇帝であることを、漢の武帝のことがらとして構成している方法である。

このことは、わが国の『和漢朗詠集』「帝王」部に収められている楊衡（唐代の詩人）作「上陽春辞」の詩句からも、言い得ることである。

聖皇自在_二長生殿_一、不_レ向_二蓬萊王母家_一
（『和漢朗詠集』巻下、日本古典文学大系219ペ）

玄宗皇帝は「長生」という名の長生殿（華清宮にある宮殿）におられるので、蓬萊山や西王母の玉殿（崑崙山にある）に、〈不死の薬〉を求めることはないと言っている。

「聖皇」は玄宗、「長生殿」は『長恨歌』に詠われている玄宗愛用の宮殿である。

七月七日長生殿、夜半無_レ人私語時（中国詩人選集13「白居易」下〈岩波書店〉115ペ）

上に記した『和漢朗詠集』や『長恨歌』の記述からも、『十訓抄』の作者は、武帝の故事を玄宗の説話として再構成したのであろう。

さて、説話の本文に戻ると、天上の果実が地上では生い育たないという、自然の摂理を会得していない玄宗の思慮のなさを〈愚か〉なこととして、金剛寺僧の滑稽譚に引いているのである。

この話の教訓は、「万につけて、能慮りをめぐらすべき也」（190ペ）であらう。

（その2）第九「可_レ停_二怨望_一事」第5話

大江朝綱（886～957年）が長男の澄明に先立たれた、その悲しみ・恨めしさを表白した追善供養の願文から書き起こされる第5話には、江淹（444～505年、中国梁の人）の『恨賦』や、玄宗皇帝と楊貴妃の故事・漢武帝と李夫人の故事などが記されている。

唐帝、楊貴妃にわかれしうらみは、長恨歌といふ文に見えたり。（249ペ）

唐帝（玄宗）と楊貴妃の死別の恨みは、白居易の『長恨歌』に綿綿と詠われ、『源氏物語』などの日本の古典文学にも、しばしば取り入れられる悲劇のロマンである。

『十訓抄』第九の主題に即すれば、『長恨歌』末尾の一句が思いやられる。

此恨綿綿無_二尽期_一（前掲「白居易」下115ペ）

ところで、この第5話には、『唐物語』（12世紀後半成立の説話物語）に類似の記述が見られる。

人と生れて石木ならねば、皆おのづから情あり。〈中略〉唯心を動かす色にあはざらんには、〈中略〉八の苦遁るゝ事なければ、厭ひても厭ふべし。（『唐物語新釈』〈有精堂〉123～4ペ）

石木ならぬ身のならひにて、この怨にしづむたぐひ、むかし今かずをしられず。

唯、傾城の色にあはざらんことをねがふべきにや。そもそも人間八苦（注2）のなかに、怨憎会苦といへる、物のうらめしき事也。

（250ペ）

前半部の類似は、両者とも共通の出典によっているからである。それは、白居易の詩『李夫人』である。

人非_二木石_一皆有_レ情、不_レ如_レ不_レ遇_二傾城_一色_一 (中国詩人選集 12「白居易」上〈岩波書店〉168 ぺ)

人間が木石のような〈非情〉の存在ではなく〈有情〉の存在であり、美人の容色にまどわされる場合もあり、それを避けるためには美人に出会わないことが大事だというのである。

後半部の類似は、両者とも仏教で説く〈八苦〉(生・老・病・死・愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五盛陰苦)に言及した記述上のものであるが、玄宗と楊貴妃の主題に即するならば、『十訓抄』の〈怨憎会苦〉は〈愛別離苦〉がより適切であると思われる。

(その3) 第十「可_レ庶_二幾才能・芸業_一事」
第64話

名曲「霓裳羽衣」の成り立ちをめぐる説話である。説話は以下の四つの小話から構成される。

- ① 月を愛でる心が深い玄宗皇帝は、中秋の名月の夜に、神仙の術を行う道士に案内されて月の宮殿に導かれる。
- ② 月宮殿は、さながら龍宮城の趣きで、妙なる楽の音に合わせて、美しい舞姫たちがゆったりと舞っている。
- ③ この舞曲を心に刻んだ玄宗は、名残りを惜しみつつ下界に戻る。
- ④ かくして、名曲「霓裳羽衣」は誕生した。

①～③は〈龍宮説話〉(異郷譚)の様式である。「斧の柄も朽ぬべくおぼされけれど」(305 ぺ)の本文は、まさにそのような証しであり、『述異記』(齊、祖冲之の撰)や『列仙伝』(漢、劉向の撰)に記される〈王質〉の故事をふまえたものであろう。

①～④に相当する本文の一部は次のとおりである。

① 唐玄宗の帝、としごろ、月を愛する志深くして、〈中略〉八月十五夜月の、^(佳)午時ばかり、〈中略〉道士先に立て、引たてまつる。(305 ぺ)

② 玉の宮殿、玉の楼閣数しらず。〈中略〉楽の声、舞の姿のどかにすめば、玉を動かすかざし、雪をめぐらす袖、みなひかりかゞやけり。(同前)

③ 名残おしながら、舞だに見はてずして、婦たまひにけり。みかど、此曲を心にしめて、世にとゞめ給へり。(同前)

④ 盤渉調の声也。霓裳羽衣と云、即これ也。(同前)

この説話の典拠は『楊太真外伝』であると思われる。

(その4) 卷第十「可_レ庶_二幾才能・芸業_一事」第65話

前話に続いて、玄宗の楽才に関する説話である。

『続教訓抄』には、玄宗が〈笛仙〉であることが語られており、ここでは、そうした玄宗の才能と併せて、笛の有する妙力とでもいふべき〈笛の徳〉がテーマになっている。

長篇『宇津保物語』における〈琴の徳〉が

思われる趣向である。『宇津保』は、清原俊蔭四代にわたる一門の繁栄を、〈琴の徳〉を通して描いた物語である。芸術が主題に取り上げられている稀なる作品である。

さて、玄宗の笛徳説話は次のように記されている。

- ① 同みかど、月の夜、笛吹給けるに、其声龍の鳴にたがわず。
- ② 術者〈中略〉龍の声とゞむる符を作て、これを封じてけり。
- ③ 其時みかど、俄に手すくみ、いきうせて、得吹たまわず。
- ④ 術者〈中略〉我術のしるし有ことを悟りて、符を破りてければ、帝もとの如に成たまひけり。
- ⑤ これよりぞ、御笛のとく極め給へることを、しりたまひけり。(306 べ)

「同みかど」とあるので、前話の玄宗皇帝であることがわかる。

笛の音が龍の鳴き声であるという伝承は、『文選』をはじめとして多くの文書にも見られるところである。

「長笛賦」(『文選』巻18)に記されている一文を次に示すことにする。

近世雙笛從_レ羌起。羌人伐_レ竹未_レ及_レ已。
龍鳴_二水中_一不_レ見_レ已。截_レ竹吹_レ之聲
相似。

②・④からは「術者」の〈術力〉譚の要素がうかがわれる。

以上、『十訓抄』に見られる「玄宗皇帝」をめぐる説話は四話であるが、その中の一話は「漢武帝」関係の説話であり、残りの三話は、『長恨歌』で知られる相聞説話が一話と、

音楽の才や徳を主題にした説話が二話から構成されている。

決して多い数ではないが、後者の音楽説話は、治世者・権力者の話として興味深い。蓋し名君は〈文武両道〉でなくてはならない。

〔付記〕

VII 漢武帝をめぐる説話

漢武帝(前158～前87年)をめぐる説話は、前述の「西王母」関係の話(唐玄宗の話としていたが、武帝の話であることは既に述べた)の他に、二話ばかり記されている。

(その1) 卷第一「可_レ定_二心操振舞_一事」 第4話

鯉の報恩譚の構成の中で、武帝の傷ついた鯉に対する思いやりを語っている。

漢の武帝、昆明池にあそびたまふに、一の鯉の鈎を捨て死なんとするあり。これを見て人をしてときはなちたまへり。其夜、御門の御夢に、鯉来りてよるこべり。次日、池に御幸したまふに、昨日の鯉、明月珠を捨て池のほとりにをきて死ぬ。そのうち彼池の釣魚をとゞめられにけり。(28 べ)

浦島太郎の報恩譚を思わせる話である。

(その2) 卷第九「可_レ停_二怨望_一事」 第5話

〈玄宗皇帝〉の段にも述べたように、〈愛別離苦〉を主題にした話群の中で、子供に先立

たれた大江朝綱（886～957年）、妃を死なせてしまった玄宗と並べて、李夫人に先立たれた武帝の悲嘆に言及している。

漢皇の李夫人におくれしうらみ、いかばかりなりけん。「骨は化して塵となるとも、此怨はきゆることなからん。」など、がふにかゝれたる、いとつみふかくこそおぼゆれ。〈中略〉石木ならぬ身のならひにて、この怨にしづむたぐひ、むかし今かずをしられず。唯、傾城の色にあはざらんことをねがふべきにや。（249～250 ぺ）

漢皇は武帝のことであり、「骨は化して」以下の引用文と、「石木ならぬ……」や「傾城の色……」は、本文にも明記されているように「がふ」（白居易の「新楽府」）に収められている『李夫人』の詩句をふまえた記述である。

縦令妍姿豔質化為_レ土、此恨長在無_レ銷期_レ、〈中略〉人非_レ木石_レ皆有_レ情、不_レ如不_レ遇_レ傾城色_レ（たとい、妍姿豔質、化して土と為るも、此の恨み長しえに在りて銷ゆるとき無からん、〈中略〉人は木石に非ず皆情有、如かず傾城の色に遇わざらんには）

武帝をめぐるとの説話は、玄宗と共有の浅慮譚、鯉を助けた慈悲報恩譚、李夫人に対する長恨譚の三話が収められている。

玄宗の場合も、武帝の場合も、治世の名君・英雄譚は語られず、伝承されているエピソードや相聞譚の類いが語られているということは、『源氏物語』などに代表される女流文学の時代を経たという歴史社会の実情と決して無関係ではあるまい。

すなわち、戦闘や政治よりも、相聞や芸術の世界が好まれるという女性的感性の所産であるという文学の特色にも通ずるあり方ということでもある。

【注】

〈注1〉『十訓抄』本文の引用は、岩波文庫『十訓抄』（三巻本）による。

〈注2〉テキスト本文は「やゆ〜」と記されているが、横組のため改めた。

〈注3〉諸本「午」とあるが、「牛」（丑）の誤字であろう。

〈注4〉『文選（文章編）二』（全釈漢文大系27、集英社）394 ぺ

〈注5〉『白居易』上（中国詩人選集12、岩波書店）167～8 ぺ